

胴割れ粒に注意！ 品質の向上に努めましょう

本年は移植後から好天に恵まれ、活着期より順調に生育が進み、8月1日現在の作況では、出穂期が7月24日で平年よりも4日早くなっています。しかし、出穂に要した日数は、平年より2日長い11日間要しており、1株内のばらつきが平年よりも大きく、特に主茎の出穂日が非常に早かったものの、分けつの出穂が日数を要したためと思われます。

収穫適期の判断は、ミニダップを活用した「試しずり」や検査員による下見を行い、収穫を行ってください。

●胴割れ粒に対する対応

本年は初期生育が良好で有効穂が確保されたことで、昨年のように未熟粒が増加することはないと思われませんが、遅く出穂したもので登熟を待っていると、主茎の玄米が過乾による胴割れを起こしやすいので避けましょう。

〈要因と対応〉

★落水後の水田土壌の乾きすぎ（土壌表面の大きな亀裂（根が切れる））

→ 登熟期間の土壌水分の保持

★刈り取りの遅れ

→ 試しずりや下見による適期収穫

★不適切な乾燥・調整

→ 胴割れ粒を発生させない乾燥

・ 籾水分が高い場合、25%までは送風温度の設定は35℃～40℃に設定しましょう。

（乾減率は0.4～0.6%/hr）

・ 気温が低くなった時期（籾の温度が低い）にもかかわらず、高温で乾燥を始めた場合にも「胴割れ粒」は発生します。

・ 張り込み量が少ない場合は乾減率が高まります。

水分が20%になった頃に水分の確認を行いましょう。

・ 乾燥機内で一時的に送風を停止して、水分ムラを無くす方法（テンパリング）を行う場合は、乾燥機の水分計で18%前後で、水分測定を複数回行ってください。